

# 看護学生における職業意識と応答態度の分析

## Occupational Consciousness and Answer Attitude in Student Nurses

山田ゆかり 天野 寛\*

Yukari YAMADA Hiroshi AMANO

近年、看護の現場をとりまく状況はさまざまに変化している。テクニカルな側面を重視するあまりの人間性の疎外やゆとりのもてない勤務状況・多忙さなど多くの問題が指摘され、ナーシング本来の意義が薄れることが懸念されている。こうした現実のなかで、看護学生は、どのような期待をナースという職業に求め、またどのように職業意識を形成していくのであろうか。

本研究では、看護学生の看護場面における応答態度と職業的同一性について検討をおこなった。その結果、応答態度については、看護学生は一般の短期大学生に比較して、評価的態度の出現が抑えられ、相手を受容し傾聴する態度が早い段階から形成されることが示された。一方、職業的同一性の確立と応答態度との関連性を検討した結果、明確な関連性は指摘できなかつた。こうした関連性は、実際にナースの職務に就き、経験を積み重ねていくなかで次第に明確になっていくものであることが示唆された。

キーワード：職業意識，職業的同一性，応答態度，看護学生

occupational consciousness, occupational identity, answer attitude, student nurse

### 1. 問題

近年、看護活動において、医療器具操作の習熟や介護技術などのテクニカルな側面が重視されるあまり、職業人としてのナース自身の人間性の疎外という問題が浮上してきた。また、高齢や重症の患者の増加、疾患の多様化、慢性的な人員不足などにより、ゆとりのもてない勤務状況や多忙さが指摘されている。こうしたなかで、例えば、患者とのコミュニケーション、あるいはその家族とのコミュニケーションを円滑におこなうことが時間的にも困難となっている。ナーシング本来の意義が薄れ、ナースという職業に幻滅を感じリタイアする者も少なくなく、勤続年数の短さも問題となっている。こうした状況は、経験の蓄積を困難にするとともに、人員不足が多忙さに一層の拍車をかけることになり、最近特に問題視されてきている医療ミス多発の要因の一端を担っているとも考えられる。そん

なナースたちも看護学生の頃は、患者との人間的な関わりを期待し、自分が社会に貢献できる専門職になることを志向して、勉学に励んでいたのであろう。

こうした現実のなかで、これからナースになろうとしている看護学生は、どのような期待をナースという職業に求め、またどのように職業意識を形成していくのであろうか。園田ら(1987)によれば、看護学生は人文系短大生に比べ1年生時からすでに職業的同一性の形成がより明確であり、さらに、看護学生の中でも職業的同一性の形成度が高い学生ほど学習意欲が高いという。このことは、専門教育期間中に、職業意識の形成が順調に進むことが望ましいことはいうまでもないが、逆に、ひとたびその職業に就くことに疑問を抱き始めると、ナース以外には進路の選択肢のない環境が、不適応を起こす大きな要因になり得ることを示唆している。

\*日本医療福祉専門学校(名古屋文理短期大学 非常勤講師)

今回は、「看護版応答態度診断テスト」の結果から、ナースとしての職業意識の有無が看護場面における応答態度にどのように影響を及ぼすのかを検討することを試みた。

調査は看護学生とその比較対照群としての一般学生（短期大学の経営学科・生活科学科学生）を対象とした。上述したように、看護学生では、1年生といえども看護専門学校への進路選択をした時点ですでに、ナースとして必要と思われる資質や理想像を自己の中にある程度イメージしていると考えられる。それに対して、一般学生は、将来的に多様な職業に就く可能性を持っており、職業について模索しているモラトリアムの時期にあるといえる。こうした視点にたって、看護学生と一般学生とでは、応答態度診断テストあるいは職業的同一性調査に関してどのような違いがみられるのかを検討する。また、看護学生について、職業的同一性の確立が応答態度にどのように影響するのかも併せて検討する。

## 2. 方法

### 1) 調査方法

「看護版応答態度診断テスト」および「自己同一性」調査項目表が実施された。

表1 「職業的同一性」調査項目表の構成

因子〔因子名〕	調査項目
第1因子：活発さ	趣味の広い 友人の多い（社交的な） スポーツ好きな 進歩的（革新的）
第2因子：淡泊さ	さっぱりした 目上の人に媚びない
第3因子：鷹揚さ	鷹揚な のんきな（楽天的な）
第4因子：母親的心情	親切な やさしい 献身的
第5因子：支配性（-）	権力を求める 支配力の強い うぬぼれの強い
第6因子：偏執性（-）	嫉妬深い 不安定な ひねくれた
第7因子：感傷性	感傷的な（おセンチな） ロマンチックな
第8因子：過敏性	神経質な（線の細い） 熱狂的な

「看護版応答態度診断テスト」（天野・山田，1997）は、ナースが日常の看護場面での患者との関係において、患者に対して、どのような態度を示す傾向があるかについての自己認知を深めるためのテストである。テスト場面は劇画で表現されており、ナースと患者との10種の対話場面によって成り立っている。場面の設定は現職のナースを対象とした調査結果にもとづいて構成されている。これまでに、看護学生および実際に臨床に従事しているナースを対象として実施し、看護学生とナースのそれぞれの応答傾向の比較の結果から、診断テストの妥当性が示されている（山田・天野，2000）。

「職業的同一性」調査項目表（山田，1996）は、「自己同一性」調査項目表（西平，1970）から抽出した「看護婦に必要な特性」と「自分自身の特性」に共通する8因子から成る21項目（表1）について5段階評定を求める質問調査である。

### 2) 調査対象

看護版応答態度診断テスト：看護専門学校学生（3年課程の1年生）157名、短期大学学生（経営学科・生活科学科 1年生）141名。

職業的同一性調査項目表：上記看護専門学校学生157名のうち、75名。

### 3) 調査の実施時期

1995年7月，1997年1月～4月，および1998年4月。

## 3 結果と考察

### 1) 看護学生と一般学生の応答態度の比較

図1は、一般学生（経営学科学生）の応答態度診

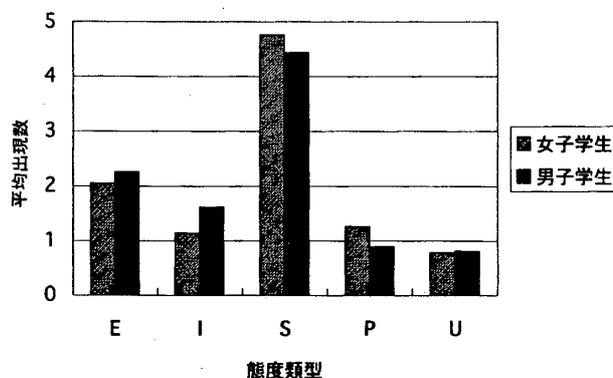


図1 一般学生の男女別各態度類型の平均出現数

断テスト結果について、各態度類型の一人あたりの平均記述数の性差を示したものである。この結果について男女間に有意な差は認められなかったため、男女を一括して対照群とすることにした。図2は、10場面を総合した場合での各態度類型の平均出現数(SD)を示したものである。これによると、両群とも5つの態度類型の中では、支持的態度(S)の平均出現数が最も多く、次いで評価的態度(E)の出現数が多いという共通の傾向が認められる。また、両群間においては、一般学生の方が看護学生よりも

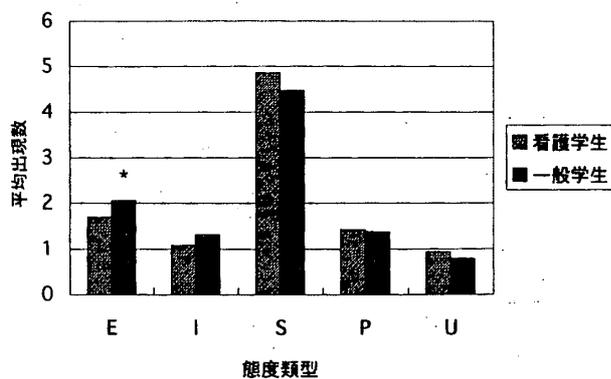


図2 看護学生と一般学生における各態度類型の平均出現数(\* p < .05)

評価的態度、解釈的態度(I)の平均出現数が多く、その他では支持的態度、理解的態度(U)ともに看護学生の方が平均出現数がやや多い傾向がみられる。そこで、両群間で各態度類型の平均出現数の差の検定をおこなった結果、支持的態度、理解的態度ともに有意な差は得られなかったが、評価的態度においては有意差が検出された(p < .05)。評価的態度とは、自分の価値判断を相手に押し付ける応答の仕方であり、対応が難しい場面では咄嗟にとりやすい態度でもある。一般学生の方がこの評価的態度が多く出現している。看護学生において、今回調査を実施した1年次のこの時期は、まだ基礎系科目を履修している段階であり、応答態度にみられる差は授業での指導によるものとは考えにくい。またもちろん臨床経験による差でもないことから、この評価的態度の差は、ナースを目指す者とそうでない者との職業意識の違いに基づいているものと考えられる。

表2は、各看護場面における5つの態度類型の出現率について示したものである。両群ともすべての場面で支持的態度の出現率は高いのであるが、場面1から5までは看護学生の方が支持的態度の出現率が高く、場面8を除く場面6から10までは逆に一般学生の方が高くなっている。また、他の態度類型の

表2 各看護場面での態度類型の出現率(%)

場面		E	I	S	P	U
1	N	19.1	12.8	49.0	11.5	7.6
	M	21.3	31.2	35.5	10.6	1.4
2	N	5.7	18.5	47.8	26.1	1.9
	M	5.0	16.3	28.3	45.4	5.0
3	N	9.6	6.4	61.8	11.4	10.8
	M	12.8	10.6	53.9	14.2	8.5
4	N	21.7	0.6	61.1	6.4	10.2
	M	40.4	2.8	38.3	5.7	12.8
5	N	17.1	3.2	60.5	9.6	9.6
	M	37.6	4.3	42.5	7.8	7.8
6	N	7.0	23.6	43.3	24.8	1.3
	M	7.1	15.6	52.5	23.4	1.4
7	N	8.3	24.8	25.5	0.6	40.8
	M	8.5	27.0	35.4	2.1	27.0
8	N	14.6	0.6	65.7	10.8	8.3
	M	23.5	2.1	63.1	2.1	9.2
9	N	43.9	12.1	22.4	17.8	3.8
	M	39.7	17.7	32.7	7.8	2.1
10	N	22.3	5.7	48.4	23.6	0.0
	M	9.9	4.3	63.8	19.2	2.8

注) 表中 N:看護学生 M:一般学生

出現率にも場面毎に看護学生と一般学生とは異なったパターンが認められる。そこで、とくに両群の間で態度類型の出現率に異なる特徴が認められた場面を取り上げて見ていくことにする。図3は、テスト場面4の患者が感情的になってコミュニケーションが極めて難しい状況での対応である。この場合、評価的態度は、「あなたの世話をするのは看護婦としての私の義務なんです」となるが、一般学生の方がそうした応答を多くおこなっている。それに対し、看護学生は「ごめんなさい、何か御用の節はお呼び下さい」といった支持的な応答が多い。次に、図4であるが、これはテスト場面5の患者のさまざまな訴えの背景に、患者の強い焦燥感が存在することを汲み取らなければならない難しい対応の場面である。一般学生は「ちゃんと指示に従ってれば、そのうち治るわよ」といった評価的態度の応答が目立っている。ちなみに、支持的態度の応答は「私からも相談しておきましょうか」である。これら場面4、5とは対照的に、逆に看護学生の方が評価的態度が高くなっている場面が図5の場面10である。ここでの評価的態度の応答は励ましの意味合いが強く、患者に早く元気になってほしいという期待のあらわれと考えられる。一般学生の方が冷静に患者に接し

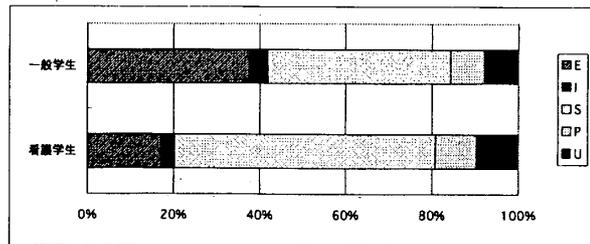


図4 場面5の各態度類型の出現率 (%)

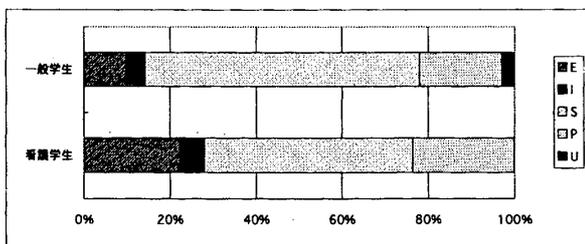
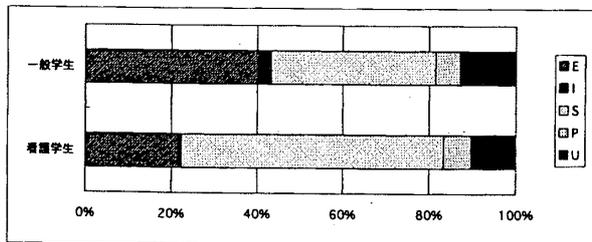


図3 場面4の各態度類型の出現率 (%)



図5 場面10の各態度類型の出現率 (%)

ている。人の援助をしたい、助けになりたいという職業選択のモチベーションの違いであろうか。

図6は、図2の看護学生・一般学生の結果と比較するために、ナースの結果を参考に付記したものであるが、この結果をみると、学生に比較して、ナースの結果において理解的態度の出現数が顕著に多いことがわかる。この比較から、患者に対する適切な応答態度が次のようなプロセスで形成されることが示唆される。すなわち、患者を理解するには、まずその患者の現在を無条件に受容することが重要であり、そのためにはナースが自分自身の評価を患者に与えようとする気持ちを抑えて患者の話に傾聴する必要がある。つまり、自分の価値判断を抑えることから理解的態度が得られるというプロセスである。

それにしても、専門科目の授業も臨床経験もまだ無いという同じ条件で、看護学生と一般学生の評価的態度に差があるということは、職業選択がなされ、将来はナースになるという意識がもたれた段階で、すでに受容というコミュニケーションに関わる態度に差をもたらしているのではないだろうか。このことは、やはり基本的にナースの問題、つまり患者とのコミュニケーションこそが、看護職選択への動機となっていることを示唆している。

## 2) 職業的同一性と応答態度の関連性

次に、「職業的同一性」調査項目表によって査定された職業的同一性の確立の程度と応答態度の関連性について検討していく。職業的同一性得点Cは、「ナースに必要な特性」と「自分自身の特性」の評定結果のずれに基づいて、 $C = 1 / \sqrt{\sum d^2 / n} \times 100$  (d:各項目の「ナースに必要な特性」と「自分自身の特性」の評定値の差、n:項目数21)の計算式によって算出され、数値の大きいほど両評定結果の一致度が高い、すなわち職業的同一性の確立の程度が高いことを示している。

前項で述べたように、ナースでは、看護学生に比較して、理解的態度の出現率が顕著に高くなっていた。職業的同一性得点についても、ナースでは、平均102.17 (SD38.04)であり、看護学生の平均70.29 (20.99)と比較して著しく高い。すなわち、職業的同一性の確立と応答態度の発達との間には関連性のあることが示唆される。そこで、看護学生のなかでも、職業的同一性得点の高い学生と低い学生では応答態度に差異が認められるかを検討してみる

ことにした。なお、看護学生で「職業的同一性」調査項目表を実施したのは、全サンプル157名のうち、75名である。これら75名について、職業的同一性得点の平均 $\pm 1/2 \times$ 標準偏差をカッティングポイントとして、職業的同一性確立の程度が高いH群 (C 81点以上) 20名と低いL群 (C 59点以下) 21名を抽出した。このH群とL群間で応答態度診断テストでの応答態度の結果を比較検討した。

図7は、H群とL群での、各応答態度の平均出現数を示したものである。H群ではL群と比較して、評価的態度の出現数が少なく、理解的態度の出現数が多い傾向が認められ、両群間にはナースと看護学生の間で認められた差異と同様な差異のあることが指摘できる。しかし、これらH群とL群の差には、いずれも有意差は認められなかった。すなわち、看護学生においては、一般の短期大学生と異なり、ナースという職業選択の結果が看護場面での応答態度に一定の影響を与えているものの、職業的同一性の確立が応答態度の発達に及ぼす影響は未だ明確には指摘できないということである。前述したように、ナースと看護学生の間には職業的同一性得点に大きな差が認められると同時に、ナースでは職業的同一性の確立と応答態度には関連性のあることが指摘されている。また、これに関連して、筆者らが同じ「職業的同一性」調査項目表を用いて現職の歯科衛生士を対象に実施した調査結果 (高阪他, 1998) からも、職務経験が長いほど職業的同一性得点が高くなることが認められた。こうした結果をみると、看護専門学校に入学した段階で、すでにナースとしての態度や構えがある程度形成されているものの、パーソナリティ全体の問題としての職業的同一性は、実際に職業に就き、臨床経験を重ねる段階になって確実なものになっていくと考えられる。

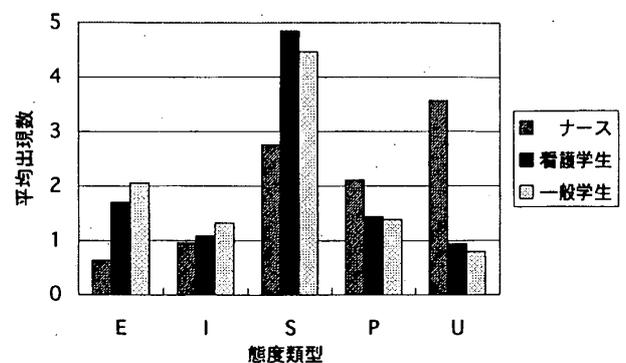


図6 ナース・看護学生・一般学生の各態度類型の平均出現数

以上、看護学生における職業的同一性と応答態度の形成について、看護版応答態度診断テストおよび職業的同一性調査項目表の実施結果から検討してきた。その結果、応答態度については、看護学生は一般の短期大学生に比較して、評価的態度の出現が抑えられていることが認められた。すなわち、自分の価値判断を相手に押し付けることを避けて、相手の話を聴くという態度が早い段階から形成されつつあることが示されたのである。一方、看護学生において、職業的同一性の確立と応答態度との関連性を検討した結果、職業的同一性の高い群と低い群の間には、明確な応答態度の違いを指摘できなかった。こうした関連性は、実際にナースの職務に就き、経験を積み重ねていくなかでしだいに明確になっていくものであることが示唆された。この点に関しては、さらに追跡調査などによる検討が必要である。

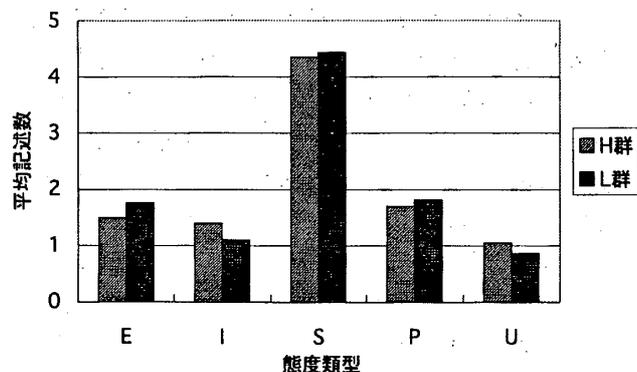


図7 H群とL群での各態度類型の平均出現数

## 文献

- ・天野寛・山田ゆかり 看護版応答態度診断テスト作成の試み 応用心理学研究第23号 (1998)
- ・高阪利美他 歯科衛生専門学校生における職業的同一性について - 現職歯科衛生士の調査 - 日本歯科医療管理学会雑誌第32巻3号 (1998)
- ・西平直喜 「存在」への自覚過程 都留宏(編) 青年心理学 有斐閣双書 東京 (1970)
- ・園田雅代・中釜洋子 職業的同一性を通してみた中堅女子社員の研究 その1: SCT法による検討 日本心理学会第51回大会発表論文集 (1987)
- ・山田ゆかり 青年期における自己概念 - 職業的同一性との関連性について - 名古屋文理短期大学紀要第21号 (1996)
- ・山田ゆかり・天野寛 看護職におけるコミュニケーションの分析 - 事例および応答態度の特徴 - 名古屋文理短期大学紀要第25号 (2000)